

中田遺跡第19次調査 現地見学会資料

平成5年11月27日(土)

(財)八尾市文化財調査研究会

調査地 大阪府八尾市八尾木北6丁目

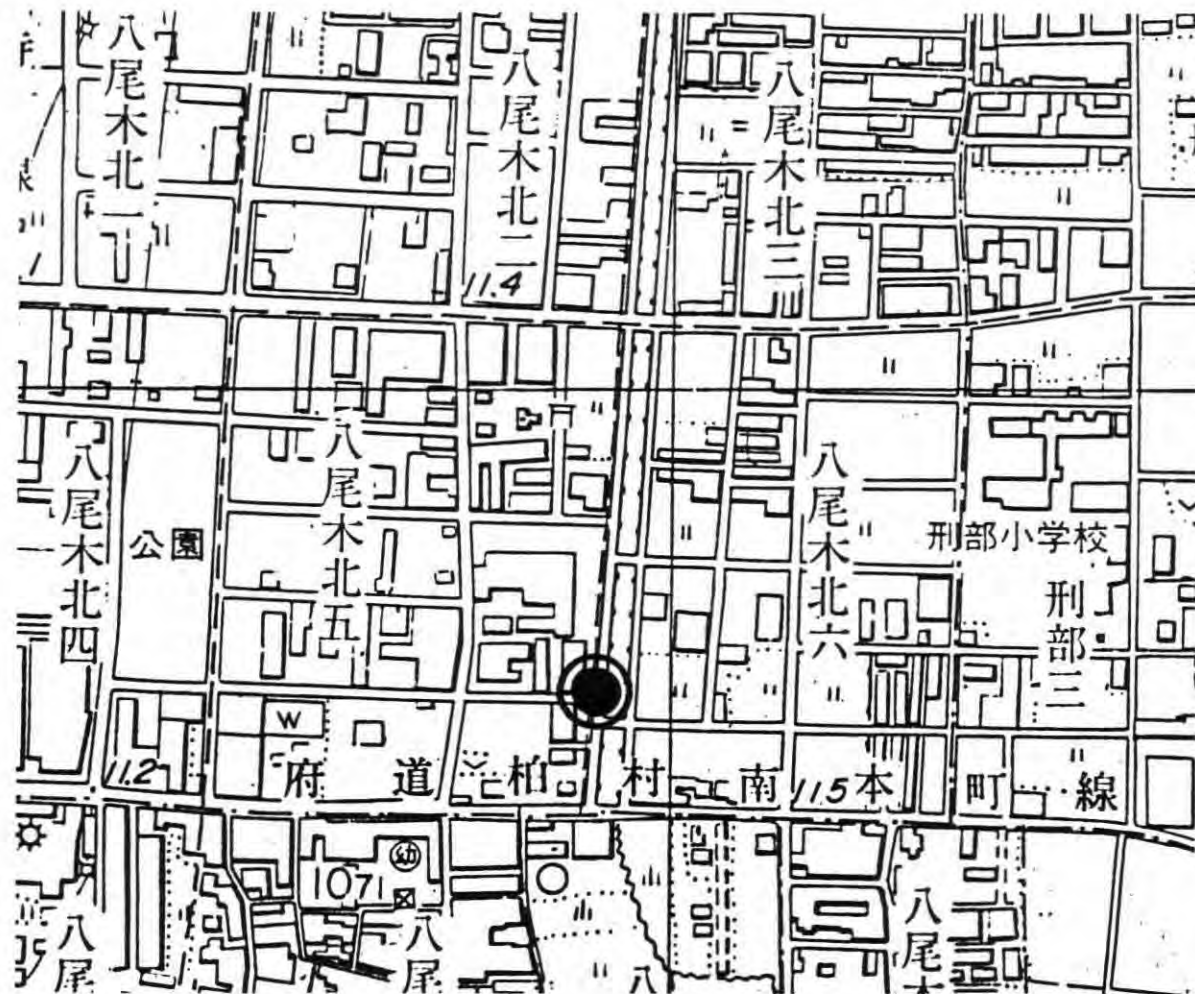
調査期間 平成5年10月12日～

●はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置しており、現在の行政区画では中田1～5丁目、刑部1～4丁目、八尾木北1～6丁目の範囲に広がっています。

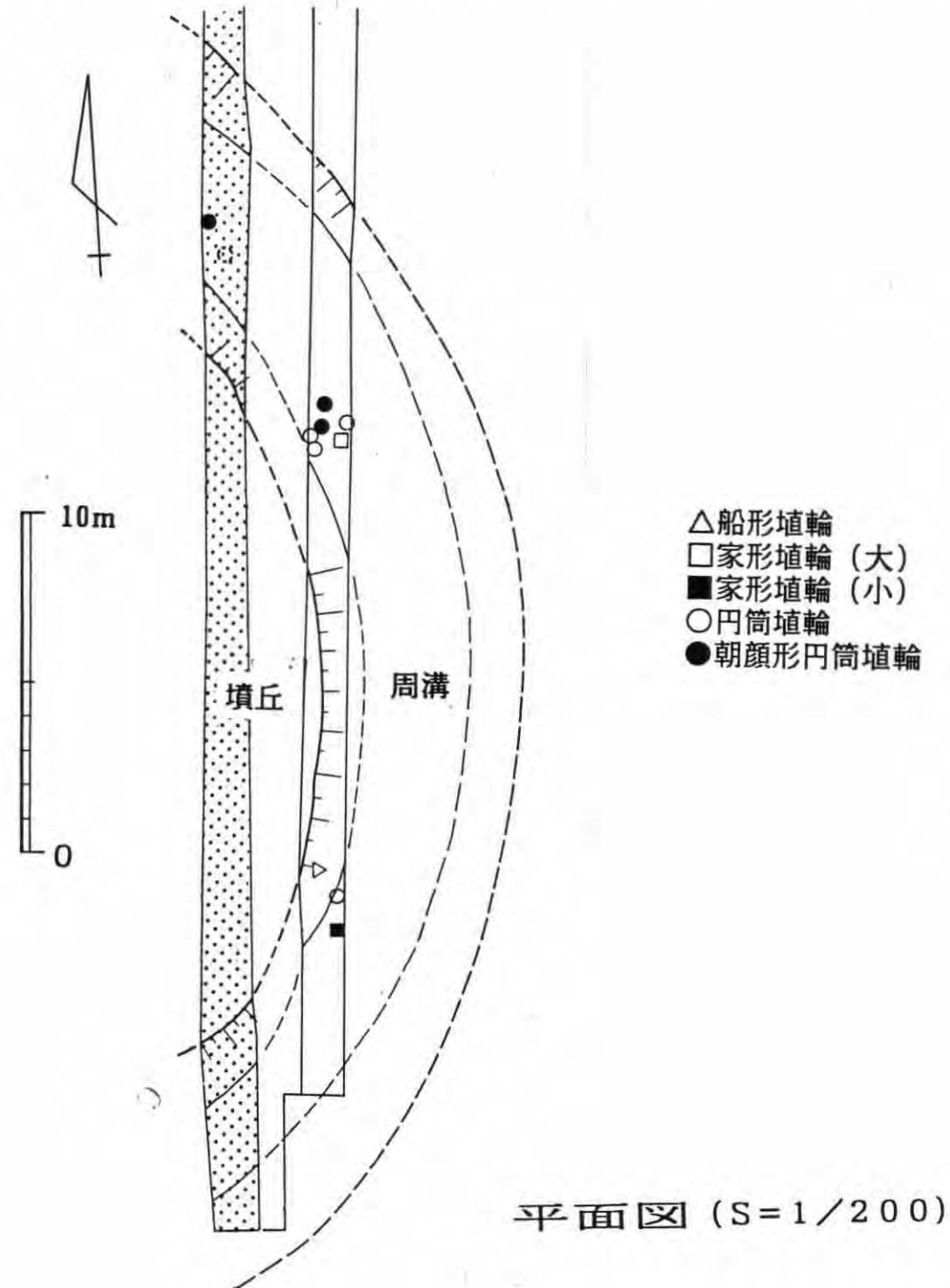
地形的には旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地しており、弥生時代中期～古墳時代前期を中心に、弥生時代前期～中世にわたる遺跡であることが確認されています。

今回の調査は楠根川の河川改修工事にさきだて行われているものです。その結果、調査区の中央、地表下約1.7mで、当遺跡内では初めての古墳が発見され、周溝からはこれにともなう埴輪が出土しました。



●古墳

発見された古墳は、直径約33.5mの円墳と推定され、周溝(幅約6m)を含めると直径約45.5mとなり、かなり規模の大きいものです。なお前方後円墳の後円部である可能性も考えられます。今回のように平地の調査で地中深くに埋もれた古墳が発見された例は、八尾市域では美園遺跡・萱振遺跡・久宝寺遺跡などがあります。



●埴輪

埴輪は古墳の墳丘上に並べられるものです。今回出土した埴輪は完形品に近いものが多く、また古墳の周溝部分の底からかなり上部で出土しています。このことから、古墳が造られた後、周溝がある程度埋まった段階で、墳丘に並べられていた埴輪が周溝に転落したと考えられます。

出土した埴輪には、船形埴輪（1点）・家形埴輪（大小各1点・他）・円筒埴輪（6点以上）・朝顔形円筒埴輪（3個以上）があります。

【船形埴輪】

残存長約35cm・高さ約8cm・幅約7.8cmを測ります。形態は、丸木船の上に板で上部構造を作る準構造船と呼ばれるものです。準構造船の実物は当地から北西に約4kmの久宝寺遺跡から出土しています。船形埴輪は全国で20例以上確認されていますが、今回出土したものは最も小型のものといえます。

【家形埴輪（大）】

屋根の形態は入母屋造で、表面には朱が塗られ、壁には柱の表現があります。入口は一か所で、窓は無く、高床式倉庫と考えられます。残存高約61cm。

【家形埴輪（小）】

屋根の形態は入母屋造で、三方の壁に窓・（入口）があります。残存高約25cm。

【円筒埴輪】

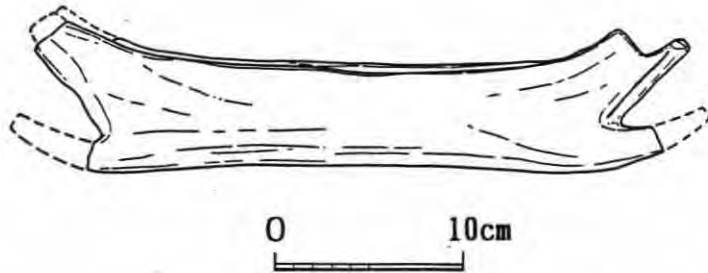
器高約55cm・口径約32cmを測ります。逆三角形のスカシ（一対）が一段のものと二段のものがあります。

【朝顔形円筒埴輪】

器高約76cm・口径約42cmを測ります。朝顔状に開く部分に朱が塗られています。一段に逆三角形のスカシ（一対）があります。

●まとめ

今回発見された古墳の時期は、出土した埴輪の特徴から古墳時代前期、4世紀後半と考えられます。古墳時代前期は中田遺跡のもっとも栄えた時期です。この時期の調査では吉備・山陰など他地方の土器が出土することも多く、地域間の交流が活発であったと思われ、それには船が使用されていたと推定されます。当古墳から船形埴輪が出土したことは、このことを証明する一例であると考えられます。



舟形埴輪側面図 (S=1/4)